

Contact Zone 2013 書評

田中雅一・小池郁子 編

『コンタクト・ゾーンの人文学 第III巻 —— Religious Practices／宗教実践』

晃洋書房、2012年、3,700円＋税、xxiii＋302頁

比嘉夏子

本書は「コンタクト・ゾーン」を鍵概念として掲げ、編纂された一連の論集のなかで、第I巻「問題系」と第II巻「物質文化」に続く第III巻に位置付けられる。プラット (Mary Louise Pratt) 著『帝国のまなざし (*Imperial Eyes*)』において提示された「コンタクト・ゾーン」概念の意図するところと、それがとりわけ人類学においても看過されてはならない理由については、編者の一人である田中が別稿で詳細に検討したとおりである [田中 2007]。若干の重複とはなるが、そこで指摘された重要な論点は当然ながら本書にも連なる問題意識であるため、簡潔に確認しておきたい。

プラットは、18世紀以降ヨーロッパ人が記した旅行記や探検記を批判的に読み解くことによって、植民地状況下におけるヨーロッパ人と非ヨーロッパ人との「接触」を捉えなおす [Pratt 2008(1992)]。そこでプラットが提唱する「コンタクト・ゾーン」という概念は、「帝國的な邂逅の空間であり、地理的そして歴史的に分断された人びとが互いに接触するようになり、継続的な関係を樹立する空間であり、通常それは強制や徹底的な不平等や手に負えない対立を伴っている」 [Pratt 2008(1992): 8]。ここでは単純で一方向的な支配と抑圧の図式を用いるのではなく、権力の非対称性の中で展開される出会いを、あくまで相互交渉として見る視点が重要とされる。またこれは必ずしも植民地状況に限られるわけではなく、「ポスト・コロニアルな状況で、またグローバリゼーションがかつてない勢いで進行していく状況で、コンタクト・ゾーンは、いまやいたるところに出現している」 [田中 2007: 32] のである。

しかし田中が指摘するように、これまで多くの人類学者は、フィールドにおける現地の人々とのコンタクトという自らの経験を捨象し、また近代とのコンタクトによって生じた雑多で混交的な世界からも目を背けることによって、純粹で自己完結的な「伝統社会」像を提示しようと試みてきた。人類学が帯びているこのような政治性を批判的に再考するためにも、そして自己と他者とのコンタクトという経験を再確認するためにも、人類学者は今コンタクト・ゾーンへと目を向けなければならない [田中 2007]。

上記の出発点から、近現代における諸宗教、中でもその実践を考察することが本書のね

233

らいである。むろんプラットの概念を引かずとも、宗教という領域が、多様な行為者の相互交渉による「コンタクト・ゾーン」として存在することを誰も否定するまい。本書でも示されているように、特に宗教領域に特有な事象として、超自然的存在あるいは現象との接触＝コンタクトがある。宗教というコンタクト・ゾーンにおいては、それまで自明視されていた境界のゆらぎが、人々にとって直接的・身体的に経験され得る。この意味でもまさに宗教実践とは、コンタクト・ゾーン概念を検討するうえでのひとつの重要な基点となる。これまで人文科学の諸領域で参照されてきたコンタクト・ゾーン概念の批判的拡大をめざすという野心的な試みは、多彩な宗教実践を取りまとめた本書のなかで結実しているといえるだろう。

本書には 11 編の論考が収められ、全体は以下の 4 部構成となっている。

第 I 部 呪術・宗教実践に向けて

- 第 1 章 虚焦点としての「真正性」——ガーナの神霊祭祀におけるディアスポラ司祭とガーナ人司祭の交渉を通して——石井美保
- 第 2 章 主体性をめぐる複数の回路とトランスカルチュレイション——マルタにおける告解の事例から——藤原久仁子
- 第 3 章 シンクレティズム論超克の試み——南アジアのイスラーム研究を中心に——二宮文子

第 II 部 夢・呪物・呪術の変容

- 第 4 章 コンタクト・ゾーンにおける夢見——一九世紀南アフリカのズールーの夢・幻視・宗教——デイヴィッド・チデスター
- 第 5 章 呪物概念への変容に見る先住民の近代への処し方——オーストラリアにおける呪医の「紐」を事例に——大野あきこ
- 第 6 章 回避されるコンタクト・ゾーン——南インドの移動民ヴァギリの呪術忌避とその変容をめぐって——岩谷彩子

第 III 部 シンクレティズムと反シンクレティズム

- 第 7 章 コンタクト・ゾーンとしての聖遺物信仰——南アジア・ムスリム社会の事例から——小牧幸代
- 第 8 章 コンタクト・ゾーンとしてのオリシャ崇拜運動——アフリカ系アメリカ人の社会運動とキューバのアフリカ系宗教との境界をめぐって——小池郁子
- 第 9 章 ラスタファアーライとレゲエの分かれがたい関係——エチオピア・アフリカ黒人国際会議派信徒による経済活動の「レゲエ化」を中心に——神本秀爾

第 IV 部 近代化／グローバル化

- 第 10 章 固有名のもとに——多重化する近代仏教——磯前順一
- 第 11 章 ヴェーダの復興——南インド・ケーララ州における古代と現代の接触——藤井正人

上記 4 つの問題意識に沿って配置された各章の概要については、本書の冒頭箇所にて田

中が十全な説明を与えているため、ここではそれを繰り返さない。以下では、本書が掲げる従来の宗教研究への3つの貢献「①宗教実践に含まれるさまざまな存在間の交流を交渉とみなすこと、②いま・ここという視点から宗教のアクチュアリティに迫ること、③研究者とその対象との再帰的關係に注目すること」[p.viii]に呼応するかたちで、各論考において提起された主要な論点をもう一度整理したい。そこで、(a) 現地の解釈と応答、(b) 「真正性」、(c) 他者からのまなざし、という枠組みを用いて各論考を架橋することを試みつつ、より詳細な検討を行うことにしよう。

まず一点目の〈現地の解釈と応答〉という問題意識は、マルタにおけるカトリックの告解の具体的なやりとりを緻密に検討し、行為主体の生成過程を示した藤原論文において明瞭に示されている。実名的で個別的なものとして成立する信徒―司祭関係において、告解とは単に信徒の隷属主体化を促す装置ではない。告解はまさに対面的な相互交渉の場、つまりコンタクト・ゾーンであり、信者に応答を求められる司祭は、自らもまた自己点検を迫られ、告白する主体とさえなり得ることを藤原は明るみに出す。信者と司祭との双方向的な変容と主体形成の複数回路を提示した本論は、宗教において現場における実践倫理が担う役割と意味を喚起する。

また信者にとってひとつの濃密な宗教体験ともいえる夢見について論じたチデスター論文では、南アフリカのズールーの夢が「解釈され、語られ、応答を求めるテキスト」として位置づけられるが、そうした解釈可能性は、岩谷論文が扱う南インドの移動民ヴァギリの呪術にも通じうる。すなわちその対象の如何に関わらず、解釈・語り・応答という一連のプロセスを経ることこそが、信仰ないし宗教を信者の直接経験のうちに組み入れること、すなわち宗教の実践に他ならない。夢と同様に、大野論文が対象とするオーストラリア、アボリジニの呪物もまた、そのなかに意味を読み込まれるひとつのテキストである。ある宗教や信仰におけるさまざまな他者・モノ・現象との相互作用を一過性の出来事とするのではなく、それら対象との継続的な関係性を構築するとき、現地の解釈と応答が必然的に伴うはずである。実践レベルにおいて人びとは常にテキストの意味を探るべく、解釈を照らしあう。そこでの解釈は、チデスターも述べるように非決定性の範疇にあるが、一見すると確固たる存在のように思われる宗教のなかに備わった、そうした「非決定的な状態」ないしある種の「余白」こそ、人びとの解釈という実践を誘いだし、諸行為を促す仕掛けとして機能しているのではないだろうか。

本書をつらぬく二点目の問題意識、宗教における「真正性」の概念は、ポストコロニアル人類学が活発に論じてきた文化本質主義批判にも連なる、重要な論点である。石井はこの「真正性」をめぐる議論に徹底して取り組んでいるが、そこでは神霊祭祀に付随する「真正性」を「それ自体は実体を持たないにも関わらず、出来事や諸実践の結びつきを根拠づける中心」[p. 21]である「虚焦点」として捉える視点を提供することで、従来の言説を乗り越えようとする。ガーナの神霊の祭りにおけるディアスポラ司祭と現地ガーナ人司祭との関係性に着目したとき、それは異種混交的な実践のなかで多様な差異やずれを取りこみながら、模倣と反復によってまさに「真正性」が承認され、再構築されている場であると石井は論じる。

異種混交的な状況こそが「真正性」を呼びこむという現象はまた、キューバのアフリカ系宗教サンテリアが米国に移入され、さらにそれが祖国アフリカのヨルバランドとの接触を経てオリシャ崇拜運動が生成されるというダイナミズムを提示する小池論文の事例にも如実に現れている。宗教が度重なる接触を続けるなかで、そのつど差異と伝統の語りが生まれ、「われわれ」の信仰がたちあがっていく。異種混交の場としての宗教的コンタクト・ゾーンの活性化は、ある文化や既存の宗教の「真正性」の強化と表裏一体の関係にあることを、祭祀実践における継承と変容の詳細な分析によって小池は明らかにしている。

上述した「真正性」の議論に関しては、南アジアにおける地域的イスラームのシンクレティズム論に焦点をあて、その理論的展開を批判的に検討した二宮論文と、同地域の聖遺物信仰という実践に迫った小牧論文もまた、重要な視点をもたらしている。先行研究においては、本質主義的、原理主義的な宗教理解から、宗教の流動性や動態へと目を向ける試みが様々になされてきたが、それでもなお「純粹さ」が称揚される傾向があることに二宮は警鐘を鳴らす。小牧が目指す聖遺物信仰も、まさにそのような流れのなかで「非—真正性」のなかに位置づけられてきたイスラーム実践のひとつである。しかし実際のところそれは全面否定されているわけではなく、また聖遺物の「真正性」はローカルな承認機構によって跡づけられてきたことを小牧は論じる。前述した実践レベルにおける個々の多様な解釈の余地の存在は、ここにおいても現れていることがわかる。

コンタクト・ゾーンとしての宗教実践から提起される三つ目の論点〈他者からのまなざし〉も、人類学で議論されてきた調査者と調査対象との再帰性（reflexivity）の問題として避けて通れないのみならず、宗教実践における他者／外部世界の直接的・間接的影響と、そこからもたらされる変容についての再考を我々に迫るものである。神本論文と藤井論文は、それぞれジャマイカのラスタファアーライとインドのヴェーダというまったく性質の異なる宗教実践に焦点を当てているが、いずれにおける行為者も、他者からのまなざしを強く自覚し、さらにそれを選択的に取りいれながら自らの実践を構築している。そこでの「他者」はもちろん複数性をもち、信徒あるいは非信徒という単純な二分法で分けられているわけではない。広範な他者の重層的なまなざしが、時間をかけて彼らの実践を変容させていくのである。

神本が論じるラスタのレゲエ音楽は、会議派／非会議派、ラスタ／非ラスタ、ミュージシャン／非ミュージシャンといった多様な構成員のまなざしが交錯するなかで、それぞれに多様な意味を付与されながら、グローバルに展開しつづけていく。このようなグローバルな他者からの影響という点に関して藤井は、南インドで衰退をたどっていたヴェーダ祭式の近年の急速な復興において、その主要な契機に外国人研究者の関心があったことを指摘する。ヴェーダの意義を他者から「発見」されたことを端緒とし、そのまなざしを自らに取りこみ、また近年の経済発展にも後押しされながら、自己の「再—発見」としてのヴェーダ復興へと到ったという一連の過程の分析は、宗教実践での他者のまなざしの効力とその展開を考察するうえでも重要な事例である。

他地域の仏教や西洋との接触という観点から日本仏教の近代化の過程を考察した磯前論文でも、この「他者からのまなざし」の問題は入念に検討されている。日本仏教が特に近

代以降の歴史において接触してきた「他者」としては、アジアの伝統的仏教や欧米の仏教学があり、それらとの間に生じた相互的な影響を磯前は詳しくたどる。特に仏教を通した西洋との接触状況のなかで、日本仏教が対外的な自己表象と対内的なそれとを巧みに使い分けていた側面は、自らに向けられたまなざしを人びとが受動的に取りこむだけではなく、ひるがえってそれを戦術的に用いるさまを示し、実に興味深い。

これほど多様な、そしてアクチュアルな事例の数々から出発し、コンタクト・ゾーンとしての宗教実践についての議論を深めた各論考からは、たんに宗教の領域にとどまらない重要な論点が鮮明にうかびあがってくる。以上ではそれを (a) 現地の解釈と応答、(b) 「真正性」、(c) 他者からのまなざし、という枠組みから再確認した。プラットのいうコンタクト・ゾーンにおける「交渉」のプロセスは、実践領域を対象とするフィールドワークによって、あるいは実践をめぐる多様なテキストの精査を通してこそ、初めて明らかになるものだといえよう。こうした意味で本書所収の論考は、宗教を無時間的にそして俯瞰的に描きだすのではなく、諸実践が積み重ねられていく歴史性も射程に入れつつ、外部世界や他者との交渉を動態的に捉えており、多くの示唆を与えてくれる。

以上のように、宗教研究にとって、また人類学的研究にとって核心的な複数の論点を、あくまで実践に寄り添うかたちで導きだした本書の到達点をふまえたうえで、いかなる今後の課題が考えられるのか。いくつかの可能性を提起しておきたい。

本書で取りあげられた宗教実践は、主に南アジアを中心として、ヨーロッパ、オーストラリア、アフリカを起点としてのアメリカ、日本といったように、多様な地域を内包している。それらの場所とはまた、地域固有の文脈とグローバルな論理のせめぎあうコンタクト・ゾーンでもある。前述のように宗教実践においては、グローバリゼーションに牽引されるさまざまな社会現象の下にあっても、ローカルな価値判断や、複数主体による解釈の余地が存在していた。このような実践の積み重ねによって生成される差異やずれ、他者のまなざしをも再帰的に取りこみながら、宗教が存続していくメカニズムの解明へと、本書は鋭く迫っている。

しかしいっぽうで、本書での事例が主として非西洋地域と重なりあうことで、絶えず参照される「他者としての西洋」イメージはそのままに強化される危惧もある。ポストコロニアル状況において、西洋と非西洋という旧来的な二分法さえもコンタクトの相互作用を介し脱構築されうるものだとすれば、両者の関係性を問いつづけると、西洋内部の側あるいは宗教的権力／中心の側からも、今後より積極的な実証研究が進展し、双方向のまなざしが重ねられ全体像が照射されることを期待したい。それは実践を主眼とする人類学的な宗教研究が、神学や宗教学の領域にどのように関わっていくのか、という側面にも関わる重要な問題であろう。

本書所収の論考から浮かびあがるもうひとつの課題は、宗教実践における世俗世界と超俗世界の連関をいかにして捉えるのか、またそれを当事者たちの世界認識や社会的文脈に沿っていかに包括的に理解するのか、という問いである。特に実践領域を照らす本書からは、世俗的な地位や価値観が宗教実践に対して直接的ないし間接的に及ぼす影響が明らか

になった。しかも興味深いことに、それらの現象は必ずしも宗教の世俗化や個人化を結論づける議論へと回収されているわけではない。むしろ宗教的なモノの商品化や、儀礼の活性化などの事例に見られたように、市場経済化に代表される世俗世界の論理が、超俗世界を補強している様相が示されていた。このように多元化と混交がめまぐるしく進行するコンタクト・ゾーンとしての宗教実践では、世俗と超俗の領域もまた複雑な相互交渉が続けている。これらの現代的な事象を古典的な聖俗理論との関連において理解することは、ここでの議論を発展させるうえでも不可欠ではないだろうか。

最後に、本書による貢献のひとつとしても挙げられていた「研究者とその対象との再帰的關係」の考察については、執筆者の全てに関わる問題にも関わらず、惜しくもその論点への言及は限定的であった。宗教という領域が研究対象となるとき、研究者自身の当事者性、すなわち対象宗教の信者ないし実践者であるか否か、はどのような意味をもたらすのだろうか。そしてある信仰体系へのコンタクトを経て、研究者自身の側にはどのような変容がもたらされるのだろうか。宗教実践というコンタクト・ゾーンだからこそ明らかにできる再帰性の問題として、もう一步踏みこんだ議論が望まれる。

以上のような課題を提起しながらも、本書における宗教への洞察それ自体もまた、ひとつの「まなざし」として相互交渉的に取りこまれ、宗教研究の土壌を豊かにしているだろう。そして宗教実践は今後も多元化し、空間的に拡張し、交渉を繰り返しながら営まれつづけることだろう。そのような実践に対し本質主義的な解釈から脱却し、「雑種への志向」[p.vii]とともに迫ることを試みる本書のように、研究者自らが宗教実践へと身を投じていく意欲的なコンタクト・ゾーン研究が、今後ますます発展していくことを期待したい。

<参考文献>

田中雅一 2007 「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国のまなざし』を読む」

『Contact Zone』1: 31-43。

Pratt, Mary L. 2008(1992) *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, (2nd ed.).

London: Routledge.